神奈川県

「ほうじょう」コラム

令和８年 11 月４日

漁場環境の調査による養殖業への支援

主任技師　野口遥平

県は、かながわ水産業活性化指針に基づき養殖業を振興しており、漁業者の養殖業の支援に取り組んでいます。本県には、現場で漁業者に技術の普及を行う「水産業指導普及員」が５名おり、私は小田原市以西の地区を担当しています。その中の真鶴町岩地区ではカキ類（マガキ及びイワガキ）の養殖に取り組んでいる漁業者がおり、今回はその支援の一部として２つほどご紹介いたします。

１つ目は、クロロフィル濁度計の設置です。クロロフィル濁度計とは、設置した水深のクロロフィル量（養殖カキの餌となるプランクトンの量の指標）や水温等の環境データを連続的に測定することができる機械です。本年の４月から漁場に設置していますが、海中に常にあるため、フジツボなどさまざまな生物が付着してしまい、測定に支障があることから、月に１回は、メンテナンス等のための回収が必要です。写真２は、７月に漁場からクロロフィル濁度計を回収した際の写真ですが、フジツボがびっしり付着しています。



写真１　クロロフィル濁度計

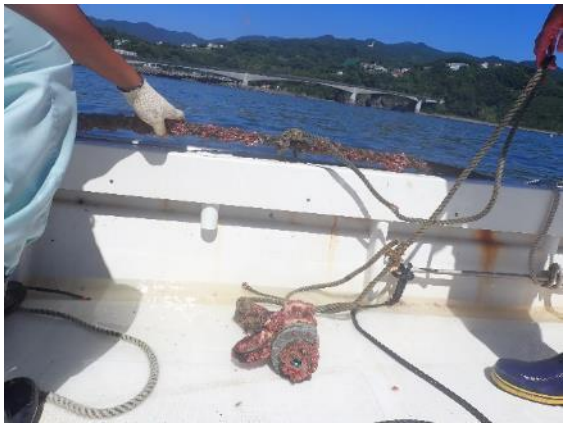


写真２　回収の様子

２つ目は、CTD による測定です。こちらは、連続的な計測はできない機械ですが、前述のクロロフィル濁度計とは異なり水深別に水温、塩分、クロロフィル量といった環境データを取得することができます。そのため、月に１回、調査船「ほうじょう」に乗って、養殖場の傍で、CTD を海面から水深 10m 程度まで吊り下げて調査を行っています。



写真３　CTD 調査の様子

今回、ご紹介した内容は、養殖場の漁場環境を把握するという支援です。これらの測定データは、日々の養殖において参考となる基礎資料となるほか、フジツボなどカキ養殖の妨げになる生物への対策を含め、カキ養殖で何か困ったことが起きた際の原因究明や対応策の検討などさまざまな場面で重要な資料となります。漁業者の方が愛情を込めて一生懸命育てた真鶴のカキを、ぜひ多くの方に味わっていただきたく、県としても技術的な支援を継続していきます。